

調査

小林多喜二『蟹工船』の読者感想

倉 田 稔

目 次

序

1 文学研究の一方法

[補] 小林多喜二アンケート

2 前提

感想の収集

1 課題・主題について

2 文章・文体・様式

3 内容部分

a 監督

b 附記について

c ロシアの話

d ストライキ

e その他

4 感想・一般的

5 感想・具体的

a 現在との比較

b プロレタリア文学

c 多喜二

d 当時について

e その他

まとめ

序

1 文学研究の方法

文学研究の方法はいくつかある。その一つは、読者論である。

児童文学者の今西祐行は、講演「私の作品世界」(1989年3月1日、小樽)で

述べた。「文学作品というものは作者が書き上げてそれで完成したことにはならない。読者に読まれ、その心の中で完成するもの」である⁽¹⁾。

ロラン・バルトは書いている。「対象としての物語は、コミュニケーションの伝達物である。物語の送り手が存在し、物語の受け手が存在するのだ。……語り手と聞き手（または読み手）をもたない物語はありえない。これはわかりきったことかもしれぬが、しかしまだほとんど活用されていない。たしかに発信者の役割は盛んに解説されてきた……。しかし読み手の問題となると、文学理論は、はるかにつつしみ深くなる⁽²⁾。」

文学の研究は、作品論、作家論、作品と作家との関係論、というのが伝統的であった。しかし作品と読者との関係論という研究も成り立つ。

本資料は、作者論でなく、読者論の試みである。

ここでは小林多喜二『蟹工船』と読者の関係を取り上げる。本年はこの小説発表後60周年にあたる。

「補」 小林多喜二アンケート

本稿を始める前に準備として、小林多喜二自身が一部の人々によってどのくらい知られているかを探ってみよう。

1987年6月29日にアンケートを採ってみた。つまり本稿の調査（＝感想の収集、1988年）のちょうど一年前である⁽³⁾。母集団は、小樽商科大学学部学生、それも小生の授業の出席者であり、1年生が132名、2から4年生が9名、学年不記入が2名で、合計143名である。ほぼ小樽商大1年生の3分の1であり、また授業出席者なので学生としては真面目な方に属する。

(1) 『北海道新聞』1989年3月2日、朝刊、小樽版

(2) ロラン・バルト『物語の構造分析』みすず書房、1988、36～37ページ

(3) 以下示すように、小林多喜二を知っているかどうかとか、その他の質問をするわけなので、小説を読んで貰う前にこのアンケートをする必要があった。

アンケートの初めの質問は、小林多喜二を、

1, 知らなかった。2, 聞いたことはあった。3, 知っている。4, よく知っている。の4つに分けて答えて貰った。

しかしこの質問への答は、かなり主観的である。また2, 3, 4の問いは、境界線が曖昧である。そのため、「よく知っている」と答えた人でも卒業校——次の質問で行った——を知らない人は「よく知っている」とはとても思えないので、「知っている」の項に入れることにすると、その結果は、143名で次の通りであった。

- 1, 知らなかった…………… 2名 (2%)
- 2, 聞いたことはあった…………… 15名 (10%)
- 3, 知っている…………… 79名 (55%)
- 4, よく知っている…………… 53名 (33%)

この結果は悪くはないだろう。しかし次の質問の答は、かなり考えさせられる。

次の、第2の質問は、「小林多喜二の卒業した学校名は何か?」である⁽⁴⁾。

1年生の結果を見よう。

正式名「小樽高等商業学校」と書いた者は、132名中6名(4.5%)であった。これ以外に、正式名に「?」を付けた者が1名いる。ただしこの学校は略称名の方がポピュラーであって、その「小樽高商」と記した者は、広い意味で31名(24.2%)である。こうして正しい知識のある人は、6名+31名=37名(28.2%)である。

(4) 答は、小樽高等商業学校、ここを1924(大正13)年に卒業している。つまりこのアンケート対象者の大学の前身校である。あるいはそれより前の卒業校としては、北海道立小樽商業学校、および塩見台小学校であるが、後二者はさしあたり必要ないだろう。

必ずしも間違いではないが不正確な答を書いている者、つまり「小樽商科大学、小樽商科大、商大、本学」と書いた人は53名(40.2%)である。

こうして両者合計して、90名(68.2%)となる。これ以外の者は、間違っ
て書いた人、または不確かな人である。

2～4年生と学年不明者(計11名)を加えると、次の表が得られる。

| | |
|---------|----------|
| 正解 | 42 (29%) |
| 誤りでない | 55 (38%) |
| 間違い・不確か | 8 (6%) |
| 知らない | 38 (27%) |
| 計 | 143名 |

以上から正しく知っている者は3割弱、間違っ
てはいない者を加えて約3分の2となる。逆に言
って、3分の1の者が小林多喜二の出身校、つまり
自分が今いる学校であることを、知らない(3割弱)か、
間違っ
たか、不確かなのである。

最後の質問は、「小林多喜二の作品で読んだものを挙げよ」である。

その答をそのまま記すと、こうである。

「蟹工船」9名。「かに工船」10名。「かにこうせん?」1名。「かにこうせん」1名。「かにこう船」1名。計22名。

「蟹工船」以外では、「党生活者」6名。「日付けのある作品……」⁽⁵⁾ 1名。「あ
る」1名。「女工哀史?」⁽⁶⁾ 1名。これらの人は皆、「蟹工船」を挙げている。

これ以外に「半分読んだ」1人、がいる。

こうして甘くみて、多喜二作品を読んだことがある人は、23名(16%)であ

(5) 恐らく「一九二八年三月十八日」であろう。

(6) これは細井和喜蔵著なので、数えないこととする。

る。

以上から見て、一般的なことを少し推量出来るかも知れない。小樽商科大学のこの学生たちは、母集団から言って大学の中でもかなり真面目な方で、この大学の学生は同年代のうちかなり物を知っている方であり、決定的には小林多喜二の後輩に当たる。それなのにこの統計数字である。だから一般の同年代の人々では、知っている割合はもっと低くなっているであろう。

また多喜二作品のうち、「蟹工船」が一番有名のようである。

2 前提

小林多喜二(1903 - 1933)の小説『蟹工船』(1928・10・28起筆, 1929・3・30脱稿, 『戦旗』1929年5, 6月発表)の読後感を, 1988年に小樽商科大学商学部の主に1年生に書いて貰い, 同年夏に提出させた。前述アンケートの1年後であり, 対象者は全員別人である。そこから, それぞれ多様な独特な意見を抜粋し, いくつかの項目別に分類した。

この際のやり方は, 以下の通りである。

- 1, 各人に書いて貰った読後感想文は平均約2千字であり, 集めた数は106編である。
- 2, 感想文中で, 同じ文言あるいは同じ内容が複数の読者によって書かれている場合がある。つまり同じ事を感じたのであろう, あるいは他の事情による。しかしこの重なった文言は一つしか取り上げていない。
- 3, 既存の解説の類を利用したものは取り上げないようにした。しかし, 小生のその取り除き方は十分ではなからう。
- 4, 抜粋に際して, 語句を少し加えたり, 余分な語句は取り去っているが, 最低限の分かりやすさのためであり, なるべく文章は生かした。
- 5, 1つの読後感想レポートからその論者の典型的な主張を1つまたは幾つかを抜粋した。また段落をつけることで違う論者であることを表した。
- 6, 条件は「小林多喜二の小説を1つ読む」ということであった。

調査対象の母集団の特徴は、次の通りである。

ほとんどが大学1年生であり、9割が北海道出身で、道内の進学校を卒業している。半分は浪人である。従って年齢は、18・19・20歳が多い。授業の出席度合は良くないグループである。

これは『蟹工船』が出版されてから59年後の収集ということになる。

感想の収集

1 課題・主題について

多喜二の作品には、彼の思想が反映されている。人民の解放と文学の革新である。

小林多喜二は、労働者たちが自然にストライキを発生させる姿を描いて、誰でもプロレタリアであること、プロレタリアの敵は資本家だけでなく国・軍でさえあること、民主化への道は孤独で遠く、苦しいことを、知らせた。

次の時代の私達に私達の知らない悲惨な時代の過去の日本について正確に伝えるために書いた。

蟹工船の惨状はわかったが、筆者の言わんとしていることがピンとこなかった。

人権を無視した当時の社会体制を批判するのはもちろんのこと、日本国民全員に訴えかけて、フランスやアメリカ、イギリスの市民革命を日本で実現させたかったのではないか。

なぜ、工場、軍需工場を舞台にしないで、船を舞台に選んだのか。一般的で大衆的な労働現場だからだろう。

多喜二は、蟹工船の舞台に1920年代の共産主義思想を描く。

共産主義の宣伝というはっきりした目的で書かれた。

ただ資本家のいいなりになって身も心もぼろぼろにして働く労働者に、もっと自分たちの置かれている現状に目覚めるようにと呼びかけている。

プロレタリア文学を読んだのは、これが初めてである。この小説の終わりに、

資本家に苦しめられながらも、しかし小さく躍動し、少しずつその力を増していく労働者たちの運動の、若い力を感じ取った。

日本の古くからの封建制度、また、資本主義に対する痛烈な批判が込められている。

この主題は、一見、虐げられた労働者の一致団結と反抗の過程であるかのように見える。しかし実は、資本主義機構そのものから必要にかもしだされる悪や横暴、激しい貧富の差、労働者階級に対する理不尽な行為などを、分かりやすく、積極的に描いてみたかったのだ。

心の中で天皇や国家に頼り切った者たちの反乱、それが悲劇を生んだ。

蟹工船の内部イコール当時の日本の社会、と考えることが出来る。

蟹工船の中の世界だけではなく、日本のひと昔前の資本主義的全社会機構の中の蟹工船として描いている。

未組織労働者が主人公である。

社会のピラミッドの最低辺にいる人々を描いた。共産党の中心人物でもなければ、そのような社会運動に何ら興味を抱いていない人々なのである。

なにごとにも「お国のため」と、国民をしばりつけていった日本の特質が強く表れている。

団結と抵抗、そこにこの小説のテーマがある。

帝国主義下における帝国軍隊と財閥、財閥と国際関係、国際関係と労働者、そのそれぞれの関係が実に分かりやすく書かれている。それを全体的にとらえることができる。

現在の政治のありかたを変革しなければならない指針が示されている。

蟹工船自体がどんなものかは全く示されていない。

資本主義の醜悪さを描いた。

プロレタリアートが強い力をもってゆく様子を、大衆に理解しやすいように、写実主義に基づいて書いた非常に素晴らしい作品である。

当時の社会の縮図である。

北海道を植民地としている。これは中国など日本の植民地経営のことも言っ

ていると考えられる。

真に生き地獄のようである。そして帝国主義の極端な例を、この中で見つけることができる。

2 文体・文章・様式

現実味がある。写實的。読んでいるうちにグイグイ引き込まれていった。

人物の姿が生き生きと書かれている。多喜二は、これらの労働者をすごく愛していたのではないか。

文章は大変読み易かった。

文面が全体的にやや幼い。

これらの描写は悪質な誇大表現か、あるいは何かの冗談か、と感じてしまった。

ヴィジュアルな表現である。

自分がまるで「くそ壺」の中にいるかのような錯覚におそわれ、思わず蚤やしらみが自分の周りにいやしないかと探してしまうほどであった。

読んでいる間ずっと、波に揺られた船の上に居るかのように、自分も揺れているようだった。

情景描写の旨さにより、自分が本当にその場面に引き込まれた。また漁夫になったような気持ちで、その立場に立って物事を考えてしまった。

こんなむごたらしいことがあってもいいのだろうか。全く驚くべきこと。今にも労働者の叫び声が聞こえてきそうです。悲惨という言葉ではまだ足りないことが、目の前に浮かぶように鮮明に書かれている。

多喜二は、嗅覚的表現をも得意にしていた。

書かずにはいられない多喜二の情熱が、平易で飾り気のない、しかしリズムのある文章の中から、強烈に溢れてくる。

読みづらい。漁夫たちのなまり言葉のせいだ。しかし意図的にしたのだろう。北海道や東北の各地から寄せ集められてきた漁夫たちの、そのいろいろな生活語の特色がとても生かされている。

方言、会話が、非常に生き生きと書かれている。

万葉以来の千数百年以来の描いたこの日本列島の四季のうつろいを、まったく新しい内容と形式、リズムで形どられた世界ではないか。

多喜二は素晴らしいアジテーションの力を持っている。

フィクションというよりもドキュメントと感じた。

空想によって書かれたものでないことに、一番衝撃を受けた。

人間をあえて非人格化し、自己の理想や感情をそのまま表出するのを避けたのは、蟹工船について書こうとしたのではなく、当時の社会状態を描きたかったからではないか。

はじめは、主人公というべき人物が存在しないので、おもしろくないなあ、という印象を受けた。

余りにも生々しい描写の作品であった。個々の労働者の独自の階層的な位置づけが、十分にはっきりと提示されていないので、前半は読みにくい。

具体的な名前が出てこないで、読みずらかった。

題材の意外さ、題名の面白さ、表現の新鮮さが、魅力になったのだろう。

労働者大衆の自然成長的な闘争に、読んでいる自分自身も参加しているような気にさせられた。

いかにも悲惨という風に、これでもかこれでもかと書かれている。

あまりに生々しい労働者たちの悲惨な生活の描写に、胸がいたくなり、彼らの闘争を応援せずにはいられなくなる。

正直言って、現在の日本の生活からは到底想像もできない悲惨な状態であった頃の事を、ここまで生々しく、グロテスクに描写するこの作品が、あまり好きではない。

現在の自分達の生活からは想像もつかない「むごい」「ひどい」状況を、まのあたりに、克明に脳裏に刻み込まれた。

この本が、思想を押し付けるようなものではなく、自然な文体で書かれているのが好ましい。

3 内容部分

a 監督

監督に対して怒りを感じる。

監督の無情さ残酷さにぞっとさせられた。元から情け知らずの人間だったのかと思っていたが、そうではない。会社の操り人形だったのだ。

監督浅川には、人情はないのか。このころの人間はかくも非情に、かくも残酷になれるのか。

この監督こそ、人情のないただの生物であり、人間ではないと確信した。

監督の浅川もまた時代の犠牲者なのであろう。

監督浅川が圧巻。

浅川が、金銭欲にとりつかれた札束の固まり、人間でなく獣、に見えた。

監督が首を切られ、だまされていたと叫んだところが、面白い。

「騙されていた」のせりふには、笑った。

ストの代表達を迎えたときの監督は、内心、恐怖に震え、わきの下は冷や汗でビッショリであったのではないだろうか。

悪の象徴、監督は、……現在の日本をも象徴している。

文章の明確さ、会話を混ぜた生命感などから、多喜二の言わんとすることは直接伝わって来る。しかし残念なことは、監督の人物性が全面に出すぎた。資本主義機構そのもまから生まれる悪や横暴ではなくて、監督の個人的な横暴にすりかえられている。

b 附記について

二度目のストライキは完全に成功した。これは自分にとっても嬉しいことなのだが、欲を言わせてもらえば、「附記」で成功したことを紹介するだけでなく、もっと監督のあわてるサマや労働者達の喜ぶ姿を読んで、スカッとしたかった。

附記で、彼らが道具ではなく、意志を持った人間になれた。

最後が、感動的だ。

「附記」は、小説としてはない方がよい。しかし、あるからこそ、プロレタリアートの闘争の小説であるとか、啓蒙性が明確に読み取れる。

最後の文は、著者の気持ちの現れだろう。

最後の句から、多喜二の日本の明日に対する希望が伺われる。しかし日本がその後突入した暗い時代を考えると、暗たんたる気持ちになる。

後半から、特に終りのところになると、なんだかあっけなく思われる。具体的には、駆逐艦に護送されてしまった後の様子である。附記の部分は、はじめから小説風にはしないつもりだったのだろう。

読み終わった時、この附記の言葉が大変印象深く心に残った。

附記を書いたのは、単純に監督等は悪い奴らだとしか取られないことを恐れたのであろう。本当に悪い者は他にいることを示唆した。

附記では、彼らの行動が失敗したのか成功したのかは全く書かれていない。作者は意図的に中途半端な感じで終わらせることによって読者の労働者たちに勇気と希望を与えようとした。

c ロシアの話

ロシアの話は、随分露骨な、資本主義社会の批判であるが、多少の誇張があるとしても、うなずけないことはない。逆にロシアの国の話の箇所疑問も感じないわけではない。

全体として暗い小説の中で、大変楽しく読んだ部分は、ロシア人から見た日本人がこまかに描かれている場面である。

出て来るロシア人は、いい人であった。だが、日本人は「ロシアが騙す」と思った。それは当時の教育と社会が背景であろう。

d ストライキ

労働者たち自身が解放を叫んだ時こそ、長かった夜に夜明けの光がうっすらと見え始めた。

仲間が連れ去られた後でさえ、もう一度彼らが団結できたことは素晴らしいことで、彼らの勇気にただ敬服するばかりである。

団結の尊さを教えられた。

代表者をたてるのでなく、労働者全員が代表者となれば恐ろしくないと悟る。

闘争の指導者が引き抜かれると、しぼんでしまう。

多喜二の皮肉は、時代が時代だけに命がけである。

労働者が立ち上がることは、今は当然のことであっても、その当時は全く当然のことではなかった。

当時は労働組合を作ることは不可能に近かった。

初めのストライキが成功してくれと、願った。

どうして、漁夫、雑夫達は、早く立ち上がろうとしないのか、どうして、こんな横暴にいつまでも我慢しているのかと思い、イライラしました。

最高に感動した場面は、「団結」のところ。

団結が強くなってからの漁夫達は、見違えるほど活気にあふれ、輝いていると感じた。

労働者たちは立ち上がった。この時、私は一種の沸き上がる快樂を覚えた。

金持ち側でなく、国民側が勝つことが快い気分をひき出す。しかし、あまりにもあっけなさすぎはしないだろうか。

労働者たちが団結したのも当然である。この漁夫たちに大いに声援をおくりたい。

自分も労働者の一員のように、監督を憎み、「サボ」を実際に行い出した労働者に胸がはずむような愉快さを覚えた。

労働者達が団結して、「サボ」を開始できるよう相談していく過程を、私がどんなに胸のはずむ思いで読み進めていったか……。

労働組合の必要なことをはっきり知ることができた。

労働者たちの大きな変化に深く感銘する。

ストライキをした労働者達はすばらしかった。

ストライキへの最大のきっかけは、殺されたくないという自己防衛本能が大半を占める。ロシア人の話がストライキへいたる潜在的なものとして影響が大きい。

再度団結してゆく姿に感動した。

蟹工船で成功したこの「ストライキ」を、当時の帝国主義日本で、国民が一致団結して成功したならどんなにすばらしいことか!

e その他

最も印象を受けたのは、次の一文であった。— 簡単に「片付いてしまった。」この一行で、すべてこの小説を物語っている気がした。

会社側の横暴には、非常に憤りを感じる。もし、この様なことが現在起これば、世論は黙っていないだろう。

会社・監督側が、自分たちのしていることが国家間、特にロシアとの闘争と考えていることに、驚く。

「この労働者たちに同情してやって下さい」と、しきりに言っているようである。

この時代に生まれなくて良かった。

多喜二は、使用者（監督）・資本家・政治家・軍人を型にはめて考えている傾向があるのではないか。

一番感動したのは、中積船がやってきたところである。

漁夫、学生、百姓などの労働者がかわいそうでならない。

これは小説の中だけでなく、まぎれもなく昔の日本にあったのだろう。

作者の念頭には、マルクスの言葉が刻み込まれているに違いない。

会社は、組織されないように未組織労働者を集めたのに、かえって組織されてしまった。

会社は、団結されないように、あらゆるところから労働者を集めてきている。

労働者たちの扱いがひどい。こんなにひどいものとは知らなかった。

最初はそうでもなかったが、終わりの方ではすっかり真剣に本に集中してい

た。

4 読後感, 一般的

まず, びっくりした。

多喜二の理想がなじめない。「理想にあふれている」という印象を持った。

面白かった。

人間にとって大切なものは何かを考えさせてくれた。

何か燃え上がるようなパワー

一生忘れられない作品になる。

のめり込んでしまった。

読みごたえがある。

圧倒された。

読後に爽快感の残る素晴らしい作品であった。

多喜二の主張は一方的な気がしてならない。

この小説の持つ大きな意味あいに驚かされる。

著者の燃え上がるような情熱や想像力を感じた。

時代劇を見ているようだ。

勸善懲悪という言葉がぴったりくる。

今までにはなかったような, 強い衝撃を受けた。

久しぶりに, 重い気分させられた小説であった。

この時代の確かな証言の役割を果たしている。

多喜二の思想がずっしりつまっている。

今ぬくぬくと生きていることを改めて思った。

教科書の「歴史」以外の「真の歴史」を知る意義が, この本の中に存在する。

一息に読み終えることのできる作品であった。

異様なまでの力強さ。文学に対する視野を広げてくれた。

これほどまでに不安感・期待感を抱き続けながら, 近代日本文学を読んだ事はなかった。

「人間は本来、どうあるべきか、そしてどう生きるべきか？」この本を読み終えた後の疑問である。

この本を読み終わると、何かやりたくなる。

5 読後感, 具体的

a 現在との比較

日本の民主化のために、何人もの人間が犠牲となり、そして今のような日本が築きあげられたということが、この本を読んでわかった。

労働者の団結と権利は、今では当り前に思われているが、蟹工船の乗組員がそれを知った時のことを常に念頭に入れねばならない。それがどれほど貴重か、そしてそれを失わないように心がける必要がある。

自分達の生活を守るためには、人まかせではなく、自分達が行動を起こすことが大切だということを、教えられた。

政治関係や権力では、現在も本質は同じで変わっていない。

労働運動の背景には、もっとずっと血生臭い闘争があったのだということを思い知らされた。

みんなで力を合わせなければ、現代でも蟹工船のような状況にならないとも限らない。

今平和に不安もなく生きている人間達への忘れてはならない過去を思い返し、現在の生活を見直すための、熱いメッセージだ。

[今の] 我々の生活は本当に恵まれているのであろうか。

自由で民主的な社会で暮らせるというのはこういう時代に生きた人々のお陰だ。

我が国もほんの数十年前までこの本のようなことが行われていたことをふまえて行っている人が一体何人いるのであろうか。

今日の発展が多くの人々の犠牲の上に成り立っていることを再認識すべきだ。

この人たちがまおかげで今のように、まだ完全とはいえないかもしれないが、人権が守られるようになったのである。

今の時代がいかに甘いものかと考えさせられる。

b プロレタリア文学

いかにプロレタリア文学として優れたものかを再認識した。

読む前までにプロレタリア文学に対して抱いていた偏見を一変させた。大変面白い小説であった。

プロレタリア文学を全く理解していなかったことに気づいた。

プロレタリア文学は触れてはならないもののように感じていた。

c 多喜二

このような小説の発表は至極、勇気のいることである。

この時期にこの小説を出版することに意義があった。

小林多喜二に敬意を表する。

何よりもすごいことは、この小説を書いたとき、我々と同じ年齢だったことである。

小林多喜二の勇気ある反帝の思想が、命がけて国民に訴えかけるエネルギーが、全身に感じられる。現在の私達にも、強く生きよ！ と呼びかけている。

日本の状態が誤った方向に進んでいることを訴えようとした小林多喜二の勇気・情当には敬意を払うより他にない。

自らの先輩であり、社会や世界に後見した人物を [私が] 知らないのは、おかしい。

d 当時について

使う者と使われる者との差が、こんなにもはっきりとしていた時代の日本に生まれていなくてよかったと何度も思った。

頂点に立つ者は誰か。これは恐ろしい。国家だ。

この時代と今の時代の違い。例えば、ストライキは、今では待遇をよくするための単なる賃上げ闘争だが、過去では死と隣りあわせの生への闘いであっ

た。

帝国主義がこのようなまでに卑劣で残酷きわまるものであったのか。

狂った非日常がその時代には日常だったと考えると、真っ暗な気分になった。

この本と出会うことで、資本主義社会の現状を、真の姿を垣間見た。

当時の社会は、これっぽちも国民のためなどではなく、天皇のため、一部の資本家、官僚の思い通りに作られていたのだと、つくづく感じる。

半封建的な日本で、常に生死の危機にさらされて働かされる季節労働者の生々しい光景に驚かされ、軍事国家の恐ろしさを感じた。

今からほんの半世紀ほど前なのに、こんなにひどい時代だったのだ。

日本における資本主義の強さを感じた。

彼が明確にした図式は、今の時代においてもいささかも崩れてはいない。

帝国主義とは、こんなことまでするのかと、あきれてしまう。

未開地、または植民地での原始的な搾取のため頭がまひしてしまったのではないか。

自分が今住んでいる北海道とは全く違う北海道がそこにはあった。

北海道の血なま臭い歴史が少し分かった。

e その他

団結、組織がどんなに価値があったか、労働者とは何か、を考えさせられた。

日本の社会運動、転機を、今まで深く考えたことがなかった。

労働者たちが強い生命力と精神力を持ち備えていることに、驚かされた。

ストライキがなければ、この小説は何の意味も持たないだろう。

なぜこの作品が後世にまで大切に受け継がれて出版されているのかが良く分かった。それは、この作品の内容が単に過去の遺物ではなく、現代社会に訴えかけるに十分な力量を兼備しているからである。

一種の恐怖感、さらには背筋が寒くなるような不快感を抑えることができなかった。

これを読むと多少なりとも心のある人ならば共産主義に傾きかけることだろう。

今、「蟹工船」を読んで資本主義の欠点を理解するには、今の日本はあまりにも平和すぎる。

労働者たち全体が主人公なので、訴えることができたのでないか。

帝国主義戦争には絶対反対しなければならないと思う。

ま と め

これらの感想文章をまとめておこう。小生がそれらを読み込む作業の中から感じたことも含めておこう。

それぞれの意見は、当然ながらバラバラで矛盾している。

多くの人々が初めてこの小説を読んだと推測される。それについては序の〔補〕から推測できる。

数人の人は、『一九二八年三月十五日』と『蟹工船』を比較しているが、皆『蟹工船』の方がよいとしているのは、興味がある。もちろん前者を読んでいる蓋然性は確証されない——多分少ない⁽⁷⁾——から、あてにはできない。

また多喜二は彼らの学校の先輩であるから、卒業生としての多喜二について述べている人も多い。

現在の若い人々の感性は、概して健全である。つまり小林多喜二のねらい、あるいは彼の小説がねらった効果は、100%ではないが、——そしてそのような小説はありえないであろう——大まかに言って、その通り受け取られている。

多くの人々は、手軽に入手できる文庫本を利用している。そのため、それぞれの巻末についている解説を部分的に利用したり、その影響を受けている面もある。

読者の多くは、現在と当時とをひき較べており、現在を「平和」な良い資本主義あるいは良い社会と見なしている。「蟹工船」のような状態は、現在ではあ

(7) 序, 2 前提, 7, によるからである。

りえないこと、過去のこと、もう再びやってこないこととしている。もちろんそれ自体は正しいのであるが、当時と今日の共通性すなわち共に資本主義だということに思いをいたす人は少ない。

理想としての・理論としての社会主義・共産主義について論じている人は多くはない。だが、それを論じている人だけを見ると、建前としての社会主義に同情を寄せる場合が多い。しかしそれでもほとんど全てのそれを論じた人が、現実の社会主義・今のソ連の状態には批判的である。つまり、現存社会主義が多くの政治的矛盾を露呈しており、それを感じ取っているのである。

ここには、小説が書かれてから半世紀以上経った現在日本の特定の若い人々の考えの一端が知られる。すなわち、現代日本資本主義社会の世界史的発展段階にバック・アップされた現実的イデオロギーを基盤にし、日本文学におけるプロレタリア文学の一定の衰退によって生まれた微妙な偏見を加味して、著者小林多喜二がほとんど全然対象にしなかった現存社会主義の混迷と迷走に影響を受けながら、しかも原本の芸術的達成と著者の手腕をある意味で超歴史的な感性のもとで素直に評価・感動している姿である。